

「マヒドン賞」受賞祝い

留学生の送別会も

「広島日タイ友好協会」が交流の夕

広島日タイ友好協会（会長＝日下善暁・浄土真宗本願寺派千暁寺住職）は、四日午後六時から、広島市区東白島町、KKR広島（旧白島会館）で、タイ国王から日下会長に贈られた「マヒドン賞」の祝賀会を開催。合わせて今春帰国するタイ国留学生の送別会も開き、五十二人が参席し、今後の福祉活動や留学生との交流を進めることを誓い合った。

この祝賀会は、タイ国の流儀で個人宛に贈られた「マヒドン賞」の受賞は、広島日タイ友好協会が、設立以来十年間、タイ国の理解、文化交流につとめたことに対するもので、会員みんなの温かい心に贈られたとして開催した。

「マヒドン賞」は、昨年十二月二十二日、タイ国社会福祉国民会議（プラパーツ会長）が推薦し、外国人としてはじめて日下会長が受賞したもの。受賞理由は、過去六回にわたる「タイ国訪問親善使節団」の派遣やカンチャナブリにある孤児難民施設「子供村学園」への慰問、タイ国北部のパヤオ県メーチャ市周辺で起こっている少女の売春婦への身売りをくい止める一助として、中学生（現在八十人）への学資救助金をこれまでに三百二十五万円送っていること、また、広島の心として「世界平和を願うシンポジウム」を、バンコク市で昨年三月二十八日に開催した実績などからである。

広島大学等で学んでいる十一人の留学生らも参加した祝賀会で、日下会長は「昨年末の受賞の際は、チャニントンさん（多田医師夫人）、鈴木章純広島日タイ友好協会事務局長（曹洞宗伝福寺住職）、妻の日下圭子とともに四人で訪タイし、バンコクにある王宮で、ソームサワリー皇太子妃から賞を受けました。『マヒドン賞』の由来は、タイ国の社会福祉活動に貢献されたラーマ九世のご尊父の名からとったもので、毎年、福祉功労者六人に出されているものです。この中には、青少年を麻薬から救った功績で、シンブリー市のアンパワン寺の住職もおられた。私たちへの授賞はいずれにしても広島日タイ友好協会がタイ国で信頼される団体になった証明であります」と述べた。

さらに「二月二日付の中外日報の紙上には、あのタイ国のスラム街クロントイで一日百バーツの収入しかない方々から『兵庫県南部地震』に対し、百万バーツが募金されたと伝えられており、心と心を繋ぐ義援金に感動したことであります。私たちは、今後できるだけ努力で国際社会の窓口の一員になってゆきたい」とつけ加えた。

また、タイ国北部の中学校生への学資援助について「小学校卒業と同時に売春婦として売られている少女たちを救うために少しでも役立ちたい。この地方の父母にも、昨年の受賞時を利用して現地に行き激励してきました。あまりの貧困故に起こっている少女の身売り問題だが、チュアン首相もご存じのように貧困をめぐる機構改革の第一歩として知事、郡長、村長、区長の行政癒着を指摘しはじめています」と伝えた。

さらに、タイ国中学生学資援助について、「今年一月十五日、浄土真宗本願寺派東京教区仏教婦人会から三十万円が当協会に届いております。私たちの善意の輪が広まることを願って止みません」と挨拶した。

このあと深崎敏之副会長の音頭で“チャイオウ”（乾杯）。続いて出席した十一人のタイ国留学生が紹介され、今春帰国する男子二人には万年筆、女子三人にはハンドバッグが日下会長から手渡された。

帰国学生を代表して、広島修道大学に六年間いたマキさんが「広島の皆さんには大変お世話になりました。私たちはいま何もお返しできませんが、帰国後、広島とタイ国を結ぶキーマンの一人になりたいと思っています」と答礼した。

さらに懇親会では「兵庫県南部地震」に対し、参加者全員がカンパし、五万六千二十九円を集めた。これは中国新聞社社会福祉事業団に寄託された。

タイ国から受賞した「マヒドン賞」の盾 [写真は省略]

(c) 1995中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)

神戸の被災地見舞う

タイのプラティープ女史

百十二万バーツの義援金寄託

タイ最大のスラム・クロントイで十八年間にわたり教育、福祉活動を行なっているドゥアン・プラティープ財団事務局長のプラティープ・ウンソンタム秦女史が、夫の曹洞宗国際ボランティア会（SVA）アジア地域バンコク事務所長の秦展也氏とともに一月三十一日、兵庫県南部地震の被災地を見舞うため夫婦で来日し、神戸市をはじめ支援を受けている六つのN G Oに総額約四百四十八万円（百十二万バーツ）の義援金を寄託した。

プラティープ女史は、「これまでに多大な協力を頂いている日本の皆様に不幸が襲いかかり、慟哭の思いで受けとめた。何か協力ができれば」との思いでバンコクのスラムの住人やシーカー・アジア財団（SVAのタイ現地法人）などの現地のN G Oに呼び掛けて「阪神の被災者に真心を贈るタイの会」を急遽結成。地震発生から二日目の一月十九日から三十日までに二十五地域のスラムで募金活動を実施した結果、十二万バーツ（約四十八万円）の浄財が寄せられた。

ドゥアン・プラティープ財団では、さらに同財団の運営基金から百万バーツ（約四百万円）を拠出して義援金とした。この義援金は、タイのスラムで貧しい生活を送っている幼い子供から老人までの真心の結晶といえる。十二万バーツといえば現地のスラムの人々にとって大変な金額で、ちなみにスラムの住人の一日当たりの稼ぎは百から百五十バーツという。

義援金が寄託されたN G Oのうち、六年間にわたりドゥアン・プラティープ財団を支援している金光教平和活動センター（森定斎理事長、事務局＝広島市中区千田町一ノ一）に対しては、八十万円（約二十万バーツ）が寄託された。ちょうど、同センター事務局長の熊田信道御幸教会長が被災地の見舞いのために同センター構成員たちと大阪に滞在中だったため、秦夫妻の宿泊先のホテル「ホリデイ・イン・関西空港」で義援金とメッセージの伝達を受けている。同センターでは、金光教の災害対策本部と提携して被災者の援助活動に有効に使用すること。

日本の被災者のためお金を出し合うタイの子供たち【写真は省略】